

前衛と抒情の語り部・・・寺山修司の原風景

白石 征（遊行舎主宰・劇作家・演出家）

① 孤児の境涯

シベリアも正月ならむ父恋し
鱈船は出しまゝ母は暗く痛む
父の馬鹿泣きながら手袋かじる
父と呼びたき番人が棲む林檎園
枯野ゆく棺のひとふと目覚めずや（われ）

ちゝはゝの墓寄りそひぬ合歡のなか
短日や孤児の母の名駅棚に
眠る孤児木枯に母奪われしか
焚火ふみ消し孤児とその影立ち上がる
ねがふことみなきゆるてのひらの雪

病む妹のこゝろ旅行く絵双六
切れ凧や妹が指さす空の果て
手毬つく妹一人春の風

父親の戦病死、母親との生き別れの境遇が想像力によるまぼろしの家族を描き出す。中学生頃の俳句で、すでに実在しない妹を詠んでいる。

② かくれんぼの鬼

「かくれんぼは悲しい遊びである」

「私は一生かくれんぼの鬼である、という幻想から、何歳になったら免れるこ

とが出来るのであろうか？」(自叙伝)

かくれんぼの鬼とかれざるまゝ老いて誰をさがしにくる村祭り

かくれんぼ三つ数えて冬となる

子供の頃の遊びの体験を比喩化した「かくれんぼ」をモチーフとして、まぼろしの父さがしの想念を、戯曲や童話、詩などで展開。寺山独自の幸福観が窺われる。「幸福とは恐ろしい。いつでも誰かを亡ぼす。——誰かでなければ、自分を」(犬神の女)

③ 母殺し

「思えば、私もいろんなものから逃げつづけてきたような気がする。家から逃げ、母親から逃げ、故郷からも、学校からも逃げた。」(旅の詩集)

「おれはこの母親殺しを遂げて、青森の 薄ぐらい線路沿いの町から脱出してやるのだ・・・」(叙事詩「李康順」)

母一人子一人の戦後の生活。生き別れ、再会、同居。そして結婚問題を通じて、激しい愛憎の葛藤が表現される。寺山のもっとも過激な秀れた作品がみられる。

母殺しのモチーフは、「李康順」ではガス管、「山姥」では姥捨て山、「アダムとイヴ」では精神病院、「十三の砂山」では海、「無頼漢」では大川で行われる。

大工町寺町米町仏町老母買う町あらずやつばめよ
亡き母の真赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり

「母恋い春歌調」「母地獄」「身毒丸」は特に代表的なものといえる。

母親を、捨て子家系の犬憑きの母と規定している。

④ 地獄めぐり

見るために両脛をふかく裂かんとす剃刀の刃に地平を映し

川に逆らひ咲く曼珠沙華赤ければせつに地獄へいきたし今日も

町の遠さを帯の長さではかるなり呉服屋地獄より稼ぎきて

寺山にとって、地獄の風景は、かつて一度見たことがあるような、生まれる前の風景でもあった。「地獄はいわば一つのドラマであり、ひなびたぼくたちの村で、ぼくたちの知っている人たちを登場人物にして〈作ら〉なければならぬのだ」。そして地獄を〈作る〉ことに失敗した人々とは、「小さな裸電球の下で、もっともかかりやすい、幸福という名のもっとも重い病気」にかかってしまった人たちのことだった。

イタコ、恐山和讃、説経石童話丸、サーカスのジンタ（天然の美）、フリークス・・・寺山演劇天井棧敷へと展開して行く。

暗闇の演劇、地獄めぐりの演劇によって、死者は蘇り、死と再生の儀式となる。

⑤ 一族再会

父親になれざりしかな遠沖を泳ぐ老犬しばらくみつむ

父ありき書物の中に春を閉じ

懐かしのわが家

昭和十年十二月十日に、
ぼくは不完全として生まれ
何十年かかって
完全な死体となるのである。
そのときが来たら

ぼくは思いあたるだろう
青森市浦町字橋本の
小さな陽あたりのいゝ家の庭で
外に向かって育ちすぎた桜の木が
内部から成長をはじめるときが来たことを
子供の頃、ぼくは
汽車の口真似が上手かった
ぼくは
世界の涯てが
自分自身の夢のなかにしかないことを
知っていたのだ

死期の迫った寺山は、仏映画「舞踏会の手帖」さながら、親しかった人生の友や母親と逢って訣れを告げ、最後の映画「さらば箱舟」のラストシーで、見果てぬ夢であった一族再会を果たしている。

略年譜

昭和 10 年 (1935) 12 月 10 日出生

昭和 16 年 (1941) 父、出征。20 年に戦病死 (5 歳)

昭和 23 年 (1948) 母、三沢を去って、九州の米軍キャンプへ。青森の親戚に預けられる (12 歳)

昭和 29 年 (1954) 母、立川基地へ (18 歳)

昭和 30 年 (1955) 腎臓病で 3 年間入院 (19 歳)

昭和 36 年 (1961) 新宿で母と同居 (25 歳)

昭和 38 年 (1963) 結婚 (27 歳)

昭和 45 年 (1970) 離婚 (34 歳)

昭和 58 年 (1983) 肝硬変と腹膜炎のため敗血症を併発。死去 (47 歳)